

はくさい(夏播き秋穫り)

栽培暦

月 作型	7	8	9	10	11	12
夏播き秋穫り		播種 定植		収穫		播種 収穫

栽培の特徴とポイント

この作型は、育苗期・定植期の高温乾燥、収穫期の多湿寡日照等によって品質・収量が大きく影響される作型である。生育適温は15~20℃。無理な早まきは避けるとともに、収穫労力や根こぶ病の発生状況も考慮しながら品種の選定・組み合わせを行い、作期の拡大と労力の分散を図ることが重要である。

品種

1 早生

晴黄60 : 播種後60日前後で収穫できる極早生種。高温期でも安定した結球性を發揮する。
(タキイ) 根こぶ病、軟腐病、ウイルス病などに強く、特にベト病耐病性に優れる。草姿は立性で球型は砲弾型。球内色は鮮やかな黄色で、葉質は柔らかい。

2 中早生

黄ごころ65 : 播種後65日前後で収穫できる。球型は砲弾型で重さは2.5kg程度。根こぶ病、ウイルス病、軟腐病などに強い。外葉や球色は濃緑で球内色は鮮やかな黄色。
黄福65 : 播種後65日で収穫できる根こぶ病抵抗性の黄芯系品種。球型は砲弾型で重さは2.5~2.8kg。球内色の黄色が強く、葉質は柔らかく甘みが強い。

3 中生

黄ごころ75 : 播種後75日前後で収穫できる黄芯系中生種。球型は砲弾型で2.5kg程度。根こぶ病等の病害に強く、在ほ性に優れ、収穫期の幅が広い。
黄苑80 : 播種後80日前後で収穫できる根こぶ病抵抗性の黄芯系中生種。球型は包頭型で重さは、3.5kgになる豊産種。ウイルス病、軟腐病に強い。

育苗管理

【ペーパーポット育苗】

1 床土の準備 (10a分で約500リットル必要・・・床土は根こぶ病に汚染されていない土を選ぶ。)
根こぶ病発病地域では、床土を土壤消毒剤で消毒するか、市販床土を利用する。

床土の施肥例 (10a分)

山土(田土)	500リットル	} 播種10日前までによく混合しておく。
完熟堆肥	150kg	
硝加磷安333	300g	
苦土石灰	500g	

2 播種（10a 分で 53 箱必要） 苗立枯れ病の発生を避けるため、ハウス育苗が望ましい。

1) 育苗箱にペーパーポット 10 号（72 穴）を広げ、床土を硬く詰めて、十分にかん水する。

2) 1 ポット当たり 1~2 粒は種し、種子が見えなくなる程度（2~3 mm）に覆土する。

10a 必要種子量：40~50ml

3) 覆土後、種が流れないようにかん水し、乾燥防止のため、濡れ新聞紙で覆う。

4) 発芽（約 2 日後）を数本確認した時点で、すみやかに新聞紙を除去する。

3 寒冷紗被覆

降雨や害虫被害を避けるため、1 週間程度白寒冷紗でトンネル被覆しておく。

4 間引き

間引きは、子葉が出揃ったら、形の揃ったものを残し、本葉展開までに 1 本立ちとする。

5 かん水

発芽後から育苗初期は控えめのかん水とし、十分に根を張らせる。後半はかん水を控えめにして苗を慣らしておこう。かん水は早朝に行い、徒長を防ぐ。

6 育苗日数

育苗日数は 15 日前後とし。本葉 3 枚程度を定植適期苗とする。

【セル育苗】

1 床土の準備

窒素成分で 50mg/リットルの市販培土を 10a 分で約 100 リットル準備する。

2 播種（10a 分で 30 箱必要）

1) セルトレーに均一に床土を詰めて、十分にかん水する。

2) 深さ 1cm の播種穴を開け、コーティング種子を 1 粒づつ播種する。 10aあたり 3,900 粒必要。

3) バーミキュライトでセル間の仕切りが見える程度に覆土する。

4) 覆土後、種子や覆土が流れないように数回に分けて十分かん水し、乾燥防止のため、濡れ新聞紙で覆う。

5) 播種後、地床に根が伸びないように、栽培ベンチに並べて管理する。

3 害虫の侵入防止

害虫被害を防ぐため、育苗ハウスの出入口、側面に防虫ネットを張っておく。

4 かん水

かん水は早朝に行い、夕方には培土の表面が乾燥ぎみになるようにする。

かん水量の目安は、育苗前半で 300~500ml/箱、育苗後半で 800~1000ml/箱程度とし、灌水ムラにならないように注意する。

5 換気

ハウス内が高温にならないように換気を徹底する。ハウス内は常にそよ風に吹いている状態が良い。

5 追肥

播種 10 日目から液肥（窒素成分 15% の液肥の 1000 倍液）をかん水代わりに 2~3 日間隔で行う。

6 育苗日数

育苗日数は 20 日前後とし、本葉 3 枚程度を定植適期苗とする。
半自動定植機を利用する場合は、本葉 4 枚程度の大苗で定植する。

理想のセル成型苗

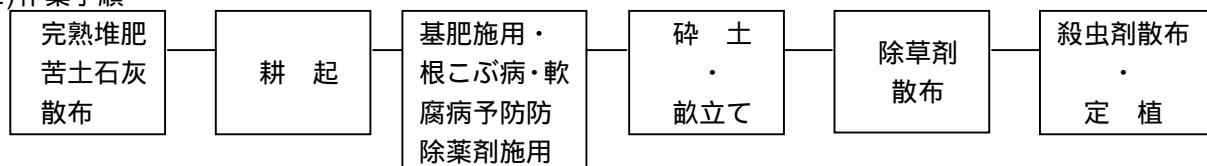


本ほ管理

1 ほ場準備

1) 本圃は、耕土が深く、排水良く、根こぶ病の危険が少ないほ場を選定する。

2) 作業手順



(1) 完熟堆肥、苦土石灰は 2 週間前までに施用する。

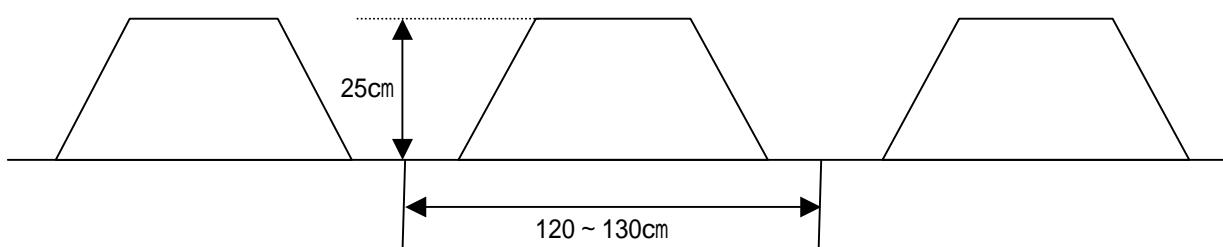
(2) 耕起作業は、ほ場表面が乾いた状態で行い、できるだけ深耕し、碎土率を高める。

(3) 施肥設計 (例)

肥料の種類	総量	基肥	追肥			成分量		
						N	P	K
完熟堆肥	2,000	2,000						
苦土石灰	120	120						
IB化成S1号	80	80				8.0	8.0	8.0
硝加磷安333	90	70		10	10	11.7	11.7	11.7
尿素	10		10			4.6		
ホウ砂	2	2						
合計						24.3	19.7	19.7

上記表内の基肥と根こぶ病・軟腐病予防防除薬剤を定植 1 週間前まで施用し、混和しておく。

(4) 畝幅 120 ~ 130cm、畝高 25cm 以上の畝を立てる。



(5) 畝立て後、定植直前に除草剤を散布する。

2 定植

1)定植時期 8月下旬～9月上旬

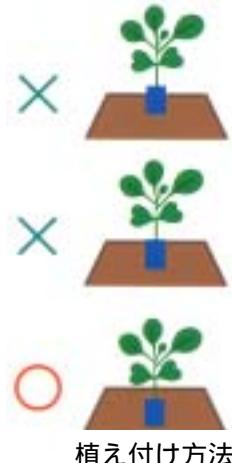
2)栽植方法

畝幅 120～130cm × 株間 45cm～50cm × 2条植え = 3,400～3,600株/10a

3)定植は高温時や風の強い時を避け、無風の午後か曇天の日に行う。

4)苗は定植前に十分かん水しておく。

5)植え穴に予防殺虫粒剤を施用し、十分に混和してから植え付ける。



植え付け方法

3 追肥

1回目の追肥は定植後7～10日目頃、2回目は定植後17～20日目頃、

3回目は結球始期に上記追肥を施用する。

病害虫防除

軟腐病：高温多湿、チツソの多用で発生しやすい。排水対策を徹底するとともに、結球前からの予防防除に努める。

根こぶ病：アブラナ科の連作ほ場や酸性土壌で発生しやすい。連作を避けるとともに、耐病性品種を選定する。また、定植前に根こぶ病予防薬剤の施用と土壌酸度の調整(pH 6.5程度)を行う。

白斑病：晩秋から初冬にかけて多雨年に発生しやすい。収穫間際で肥料切れ状態となった時に発生が助長される。肥料切れさせないようにするとともに、予防防除を徹底する。

コナガ、ヨトウムシ、オオタバコガ：発生初期の若齢幼虫時からの防除に努め、球内に入りこまないよう結球始期に重点的に防除を行う。また、害虫に抵抗性が発生しないようローテーション防除に努める。

収 穫

球のしまり具合をチェックし、硬く結球したものから収穫する。若どりに努め、取り遅れないように注意する。また、軟腐病に罹病していないか切り口の褐変の有無を確認してから箱詰めする。

販売のポイント

品種は現在主流となっている黄芯系品種を使用するとともに、市場流通の場合は、大玉の単価が低いことから、2L中心の出荷とする。